

Title	テリアカ考(二) : 文化交流史上から見た一薬品の伝播について
Sub Title	The Theriaka : a historical study of an Antidote (II)
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1964
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.37, No.3 (1964. 11) ,p.11(253)- 49(291)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19641100-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

テリアカ考 (三)

——文化交流史上から見た一薬品の伝播について——

前 嶋 信 次

目 次

- 五、諸種テリアカの処方、効能、使用法など
- 六、スペインのイスラム社会とテリアカ
- 七、イル汗国時代のテリアカ
- 八、マムルーク朝時代のテリアカ
- 九、テリアカ絵本のこと
- 一〇、医人たちとテリアカの由来

註 一―三四

図版目次

- 一、テリアカ絵本の標題と著者名
- 二、テリアカ絵本の製作年代・書家名など
- 三、献辞のあるページ
- 四、毒蛇の図
- 五、薬草図譜(一)

テリアカ考 (二)

六、薬草図譜(二)

七、女神像(一)

八、女神像(二)

九、バグダードの護符門の彫刻

一〇、ゲデア王の盃

一一、ギリシアの医人たち(一)

一二、ギリシアの医人たち(二)

一三、ギリシアの医人たち(三)

一四、テリアカの調製(一)(アブラークリードス)

一五、テリアカの調製(二)(アフラーグーラス)

一六、アンドロマクスと蛇に咬まれた若者

一七、毒蛇の人助け

一八、アンドロマクスと農夫たち

一九、死者の蘇生

(二五三)

一一

本稿のその一で、私は古代ギリシア人の発明した万病薬たるテリアカが、いわゆるヘレニズム文化の波にのって、隋唐時代の中国にも伝えられ、さらにわが国人にも知られていたことなどを述べ、また、西アジアではアラブ人の医学にもとりいれられ、十三世紀のナジュムツ・ディーン・マハムードの医療書中には詳細にその製法がしるしてあることに及んだ。同書は、当時多種類のテリアカが用いられていたことを伝えているが、そのうちファールーク（または大テリアカ）、四色のテリアカ、アザラのテリアカ、最も役に立つテリアカの四種の製法を訳出して見たのである。これらによって我々は、そのころのアラブの医家が、どのような材料を調合してこの薬を製していたか大体を了解し得るようになる。これらの外にもナジュムツ・ディーンは「シーリーシヤ」「ペルシア薬」「単テリアカ第一」「単テリアカ第二」「ミトリダテス」の五種のテリアカの製法を述べている。「シーリーシヤ」Thilithya は大きな錠剤で、その効能はテリアカと同様であり、ある医家はこれをテリアカの類に加えている。この中にはあらゆる効能を含み、その処方にはあらゆる不思議さが秘められている。癩癩、卒中、中風症、疝痛、顔面麻痺、筋肉拘縮、記憶喪失、痙攣、恐怖症、口臭、動悸、半身不随、発狂、腹痛、肺痛、鼓腸、関節の痛み、痛風、子宮の痛み、目まい、流産、母体内に胎児が残ることなどによく効き、また鼻からこれを吸えば、頭痛・偏頭痛をいやすことが出来る。「処方」上質の麝香、白豆蔻^{ビヤクスケ}、バルサム木、甘遂（ユーフォルブ）、ウシュナン・ナバティ（ナバタイの塩の義、一種の薬草という）セロリの種子、芸香の種子、地衣、硫黄、野牛の糞、山の黄土（小アジア、エジプト、チュニス、スペインなどからとれる土の一種、薬用にする）樟腦、白色および黒色のヘレボルス（薬草の一種）、かやつりぐさ、安息香、シナのマミーラーン（鬱金か或は薑黄であろう。イブン・バイタールにマミーラーンはシナより来るとある）、アスパラガスの種子、バダスカーン（またはバダースカーン。アゼルバイジャンなどで産し、利尿剤に用いられ、またエジプトのコプト教徒やザンジバルの住民はこれをもって腕輪をつくるという。L. Leclerc はこれを学名 *Spartium Juncum* という植物と同一と考えている⁽¹⁾)アサービア・スフラ

(黄色い指の義。アラビア語でアーイシャの手、マリラムの手などとも呼ぶ。花は蘭科の白山千鳥のそれに似、その根は乳児の拳大で、五指または六指の人の手の形に似、内部に汁液をふくむ。砂地または海岸に産し、その根が薬に用いられるという) 菊ぢさの根、マハレブの種子(杏仁かその類であろう)、白芥子、以上をそれぞれ二ドラクマづつ。次に穴をあけない真珠、サフラン、インドのサーデジュ(マラバスルムのこと。甘松香とするものもあるも誤りの由)、寄生木、皮つきの肉桂、肉豆蔻、海狸香、イドヒル(シュナント)の花、油菜の種子、ヒソップの種子、以上をそれぞれ十ドラクマづつ。金と銀を削つて粉にしたもの、ザルナブ(アラビアに生ずる香草の一種、ばったの足とも呼ぶ。その匂いはシトロンに似るといふ) バルサムの種子、くろたね草、緑馨(緑)(シャヒーラ、イラークのザージュ、靴屋のザージュなどともよぶ) 狐の糞、風鳥草の根皮、以上をそれぞれ半ドラクマづつ。蚕のまゆ(これは焼いたのでもよく、焼かぬものでもよい)、白胡椒、生薑(しょうが)、いのんどの根と種子、りんどう、西洋とねりこの実、インドの塩、ペルシアの花薄荷、ヒレトリウム、丸形のうまのすずくさ、インドはしばみ、ねず、丁字香、ユダヤの瀝青、白プリオニア(ファールシラー、ペルシア語でハザール・ジーシャーンともいふ)、葡萄に似た蔓性植物、その実は赤くて房をなす)、以上をそれぞれ四ドラクマづつ。甘松香、クスト(アラビア、インド、シリアその他に産する香木。樹液が芳香をはなつ。Costus) ハルマン(アラビアその他に生ずる香木、葉は柳に似、花はジャスミンに似て白く、芳香をはなつ。これを胡麻その他の油にとかす。もう一種、紅花をつけるものもあるという) はこねそうのくき、しようづく、以上をそれぞれ八ドラクマづつ。青百合の根、にくづく、牧場の土、甘草汁、いばらの汁、以上をそれぞれ一ドラクマ。乳香を三ドラクマ。マンドラゴラ第二〇号の実、茴香(ふいきょう)の種子、ヒソップ、以上を各六ドラクマづつ。黒胡椒、白ひよすの種子、長うまのすずくさ、阿片、以上をそれぞれ二十ドラクマづつ。えびらはぎを四ドラクマ半。木綿の種子と珊瑚とをそれぞれ四ドラクマづつ。これらをすべてよくつき砕き、絹ぶるいでこし、葡萄汁を煮つめたものに十分に漬けておく。泡だった蜂蜜を全部の三倍の量だけ加えてよくこねあわす。瓶

にに入れて密封し、六カ月後に服用するが、一回の服用量は一ドラクマである。」

次に「ペルシア薬」*Dawa' Farisi* と云うものについては次の如く述べている。

「ブズルク・ダードゥとよぶもの。主要で最もすぐれた薬品のひとつで、ペルシアの帝王たちが、大変に尊重したものである。テリアカに類し、テリアカの効能の一部と同じ効能をもち、シーリーシャヤの効き目はすべてそなえている。疝痛を鎮めるにはもっともよろしい。〔処方〕サフランと白ヒヨスの種子とをそれぞれ四〇ドラクマ。阿片とオイフォルビウムをそれぞれ二十ドラクマ。甘松と安息香とをそれぞれ四ドラクマ。インドのマラバスルムと丁字とをそれぞれ四ドラクマ。白胡椒を二ドラクマ。穴のない真珠、塩化アンモニウム、野生芸香の種子、麝香、樟脳、シヨウズクの実（カークラ・カルダモム）、肉桂（ダールシーニーとよばれるもの）桂皮（サリーハとよばれるもの）*Cinnamomum Cassia*）以上をそれぞれ一ドラクマづつ。クスト（コストス）を八ドラクマ。ハルマルの種子、ヒレトリウム、長胡椒をそれぞれ四ドラクマ。サクビーナジュ（*Sagapenum*。ペルシアに生ずる一種の樹液、薬用とする）海狸香、オポパナクス（ギリシアに多く生ずる香木。樹脂を香料や薬に用いる）をそれぞれ二ドラクマ。ザルンバード（薑黄に類する香料）ドゥルンジュ（*Doronicum*。シリアやレバノン地方に多い薬草）バルサム油をそれぞれ八ドラクマづつ。乾いた薬材は挽きつぶし、絹ぶるいでこし、水分のあるもの、湿ったものは青いなつめの実を煎じた汁に漬けておく。すべてをよくませあわし、三倍量の泡だった蜂蜜でこね、六カ月後に服用する。一回の服用量は一ミスカール。」

次に製造後すぐ服用出来るテリアカの製法を述べているが、これには特別の名称はつけてない。そのひとつは

「諸毒に効験がある。〔処方〕乾いちじく五十ドラクマ、芸香ツンクの葉を乾したものを三十ドラクマ、野生にんにく二十ドラクマ、塩十ドラクマ、これらをすべてよく搗き、ふるいにかけて、つぶしたいちじくの実でこねあわせる。服用量は三ミスカール。製造後、すぐに使用できる。」とあり、もう一種のテリアカについては

「塩づけのいたちの肉を約十ドラクマほど服用すると、毒を消すことが出来る」とある。

最後にもう一種ミスルーディートゥース（ミトリダテス）と称するものの製法をしるし、これは最も優秀なテリアカの一種であるとし、その効能と処方とを述べているが、すでに種々のテリアカのことを紹介してきたし、格別、新しい材料をも使用していないので、ここには省略することにした。ただその効能のところ、諸毒を解き、狂犬にかまれたときにも効験があり、さらに気分が鬱屈したのを治し、顔色をよくし、音声を明るくし、胆石や他の体内の結石をくだき、視力を鋭くし、頭脳の働きを活潑にし、青春を保ち、無気力の男子に活力をあたえ、怠けものを奮起させるとしてある。

またその次の章で諸種の薬剤が効能を發するまでの時間、および有効期間というものを述べて次の如く記している。

大テリアカは製してから五年間ほどを経過してからはじめて服用されるものである。實際は十二年位、放置したものが望ましい。何故と云って、その位の年月を経ないと本当の作用を發揮しないからである。いずれにせよ、少くとも七年間たないものは使用しない方がよしい。その十分な効力を保つのは三十年間くらいであるが、この期間を過ぎて、その使用の場合によっては、なお相当の効力を保っているものである。とに角、製造後三十年を経ると、効力は徐々に低下して、六十年目くらいまでに及ぶ。三十年を越したものは、もはや毒あたりや咬まれた毒には殆ど効能がなくなるし、もし少しは効くにしても、全く微弱なものである。六十年を越えたものは、外觀は糖衣錠の如くになって、軽度の病気に効くのみである。毒虫に刺されたり、毒蛇や狂犬に咬まれたりした場合、その他の諸毒や、毒薬に中ったときは、力強い薬を用いなければならぬので、まだ新しいテリアカを服用しなければならぬ。

ただし、テリアカの種類によって、有効期間も一様ではなく、七年位有効のものもあれば、半年位のものもある、と云っている。

更にその次の章ではテリアカの効能の試験法と服用量とを記している。それによると、第一の方法は、コロシントの果

肉とか、三色ひるがおの如き強い吐瀉剤を吞ませてから、二分の一ドラクマのテリアカを服用させる。吐瀉がとまれば、そのテリアカは効力のあるよいものであるが、その反対の場合は、なにか混ぜものがあって、効目の弱いものであることがわかる。第二の方法は山鳥に二分の一ドラクマのテリアカを吞ませておいて、毒蛇かその他の有毒動物にけしかける。鳥が死ななければ、そのテリアカは混ぜものない優秀品であることがわかるが、その反対の場合は劣等品である。

服用量については、毒蛇に咬まれた場合はテリアカ一ミスカールに古い葡萄酒四オンスをそえてのます。狂犬に咬まれたときは、テリヤカー一ミスカールにざりがにの黒焼五ドラクマをあたえる。さそりに刺されたときは二分の一ドラクマ、蜂の場合は二ダーニクに酢をそえてのます。阿片だとか毒人参、ヒヨスの如き毒物や毒薬を呑んだ場合は二分の一ないし一ミスカールに芳香のつよい葡萄酒をそえて服させる。胸の病、悪性の咳、胃や腸の鼓張、異常空腹、熱がないのにふるえる場合などは二ダーニクをあたえる。癩癩、卒中、目まいなどの場合は二分の一ないし一ドラクマを、疝痛あるものには二分の一ドラクマをあたえる。

すべてテリアカを用いる場合は、必ずまずその良否、強弱を確めてからにしなければならぬといっている。

六 スペインのイスラム社会とテリアカ

右に述べたところで、アラブ医学にとりいれられたテリアカの製法、その種類、用法などがかなり明かになったが、次にこれがどのように行われたかという点を実例について考えて見たい。時代や場所については若干の不整頓な点があるかも知れないが、その点は御寛恕を願いたい。

八世紀はじめに、アラビア人はベルベル族と協力してイベリア半島を征服し、やがてここに絢爛たる西方イスラム文化の華を咲かすに至ったことは周知の事実である。ことにガダルキビル川にのぞむコルドバは、その大中心となり、西欧諸

国の学徒も笈を負ってここに学ぶものが多かった。ここを都としたウマイヤ朝（七五六一—一〇三一）の全盛時代の遺物のひとつとして「コルドバ歳時記」というアラビア語の珍籍が発見されている。これを最初に紹介したのはリブリ *Libri* という人で、一八三八年にパリで「イタリア数学史」 *Histoire des sciences mathématiques en Italie* を刊行し、その第一巻（四六一頁以下）中に *Zeid* の子 *Harib* の *Liber anoe* なるものをラテン語のまま入れた。これが最初のようなのであるが、その原本が、同じくパリーのビブリオテック、ナシヨナルで見られたのは一八六六年になってからである。その原本はアラビア語のものでヘブライ文字をもって記されてある。ライデン大学のドズィ *R. Dozy* 教授はこれを写しるとともに、スペインのイスラム史研究者 *Francesco Javier Simonet*（一八二九—一九七⁽²⁾）にも示したので、後者は一八七一年に、これを *Santoral hispano-mozárabe escrito en 961 por Rabi ben Zaid, obispo de Iiberis* と題して発表し、ドズィもまた一八七三年に *Le calendrier de Cordoue de l'année 961* と題し、そのアラビア語原文とラテン語訳とをライデンで出版した。その後、これについて研究する人たちが何人か現われたが、要約するに、この書はアリーブ・ブヌ・サード *'Arib b. Sa'd al-Katib*（タバリーの年代記の続編の著者で、九八〇年頃没）の *Kitab al-Anwa'*（星宿の書）と、コルドバで、英主アブドル・ラフマーン三世につかえ、ドイツ皇帝オットー（大帝）の宮廷や、コンスタンチノーブルおよびエルサレムなどへも使者として赴いたエルビイラの司教 *Recennundo*（アラビア語名は *Rabi' b. Zayd al-Usqif* ただし、ウスクーフとはカトリックの司教を意味する）が、アブドル・ラフマーン三世の子アル・ハカム二世にアラビア語で書いて献上した *Kitab tafsil al-zaman wa-masalih al-abbdan* と題する一年中の宗教行事を書いた本とを誰人かが綜合することにより出来たものではないかという説をドズィが出している。⁽³⁾ いずれにせよ、スペインのウマイヤ朝の最も華かであった西紀十世紀中ごろのものであることは疑ない。

この書の六月五日（但太陽暦）の条には「この日、および、月はじめからこの日までには、毒蛇を捕え、テリアカ（*al-*

tiryāq) のための丸薬を製するによろしい」とあり、また同じ月の二十五日の条には「ファンとパプロの日。(Juan wa Fablu。ともにスペインの殉教者)。この日または、この日から月末までの数日間に大テリアカ (al-tiryāq al-akbar) およびこれに類する保存用の練薬の調製を始める。この時期に諸薬草を集めることが可能だからである」とあるが、⁽⁴⁾同書のラテン訳文には薬草の次に「および花」とあり、また末尾に「またその調製にあたり、暑気が諸汁液の調合に好結果を来たすためである」とあるが、⁽⁵⁾これらの言葉はアラビア語テキストにはない。またラテン語訳の方は十三世紀に出来たものであるという。

これによって、そのころすでにスペインのムスリム社会では、毎年の六月にテリアカを調製することが、行事のひとつとなっており、それには毒蛇も材料の一つとして用いられていたことなどがわかるのである。

中国でも陰曆五月は薬をとるに適していて、年中行事中にそれが加えられていたらしい。荊楚歳時記に、五月五日を浴蘭節といい、四民ならびに百草を踏む。また百草を闘わすの戲あり。艾^{よもぎ}を採りて以って人(形)に為り、門戸の上に懸けて、以て毒気をはらうとあるし、また「是の日競渡し、雑薬を採る」としるし、夏小正に、此の月(日)薬を蓄え、以て毒気を蠲^{えん}除すとあるのをも引いている。⁽⁶⁾また千金月令には「五月五日・午時、百薬心を探りて相和搗し、桑樹心を鑿して孔を作り、薬をその中に内^{おさ}め、泥をもってこれを封じ、満百日にして、開取して暴乾し、搗いて(粉)末となし、もつて金瘡に伝う」とあるし、その他にも五月に薬を製したという記録がかなり多く見受けられるようである。⁽⁷⁾その時期がコルドバの歳時記の六月と大体符合するのは興味ある現象の如く思われる。

またゴンサレス・パレンシアのイスラム時代のスペイン史によると、やはりコルドバのウマイヤ朝のカリフ、ヒシャーム二世(在位九七六一—一〇〇九、および一〇一〇—一〇一三)の侍医であった Abenchohchol は、九八二年に本草書を著わし、また別に一卷の「テリアカ論」をも書き、他の医人たちの誤謬を指摘したとある。⁽⁸⁾ Abenchohchol はイブン・シ

ユルジュル Ibn Juljul, Abū Dawūd Sulaimān のなまり、九四三年に生れ、コルドバで学んだが、十四歳位から医学に精進し、やがて一代の名医として名声を博するに至ったという。その没年ははっきりしないが、大体九九四年までは生存していたらしい。⁽⁹⁾ ブロックelmanもアラビア文学史中で、この人の著述中に *Fi adwījet at-tiryāq* をあげているが（巻一、頁二三七）、これが、前記の書のことであろう。イブン・ジュルジュルは別に *Ṭabaqāt al-'aṭibbā' wal-ḥukamā'*（医師や賢人たちの幾世代）と題する医学史をも書いている。アラブ世界の当時の学者たちがよく利用していたギリシア、ペルシア、インド、シリアなどの諸学者の著述のほか、この人は特にラテン語文献を利用したということで、学界に特異な地位を占めていたらしいのである。この書の中で、イブン・ジュルジュルは、コルドバのカリフ、アブドル・ラフマーン三世（在位九一二―九六一）の時、マシュリク（バグダードを中心とする東方イスラム世界）から医学や、その他の諸学の文献がもたらされ、人々はこれに関心を寄せた。それでこのカリフの治世のはじめに初期の名医たちが頭角を現わしはじめたのであると述べている。⁽¹⁰⁾ テリアカに関する文献なども、このような時期に東方イスラム世界からスペインにもたらされ、その地の医学界にひろまったものかも知れないなどと思われるのである。

またエルサレムの *Husām Wafā Diyāni* という人が一九三四年にハンブルク大学の医学部に学位論文として提出した「スペインにおけるアラブ医学史」によれば、アリストテレスの哲学の祖述者としても有名なイブン・ルシュド（*Ibn Rushd*、ラテン名 *Averroes*、一二二六―一一九八）にもテリアカ論があつたことが指摘してある。⁽¹¹⁾ この書はブロックelmanによると *Magāla fir-tiryāq* と題するもので、エスコリアル⁽¹²⁾の僧院にその稿本が保存されているとのことであり、一一二六年には *Bellona* の *Andreas Alpagnus* がこの書をコルドバにおいてラテル語に訳したとのことである。⁽¹³⁾ こうして、ギリシアからイスラム世界に伝えられたテリアカの知識は、ラテン語などを通じて、ひろく西欧諸国にもひろまっていったものと思われるのである。

同じくフサーム・ワファアの書によるとイブヌル・ルーミーヤ Ibn al-Rūmiya という人は、十二世紀末にセビーリヤで生れ、一二一六年に東方旅行の途についた。エジプトのアレクサンドリアに到着したところ、その地の知事が、この人の命名を聞き知り、カイロのスルターンの宮廷に赴くようとりはからった。そのころエジプトはアイユーブ朝の下にあり、建国の英雄サラディンの弟、サイフツ・ディーン Sayf al-dīn (Saphadin) の治下にあったが、イブヌル・ルーミーヤはそこに暫く滞在し、スルターンのために必要な薬物をあつめ、これを練り合わせてテリアカを調製したという。帰国後、本章書、旅行記などをも著したといわれている。⁽¹⁴⁾すでに西方イスラム世界の医学が東方でも高く評価されるに至っていた一証となるであろう。この人の伝はアル・マツカリーの書(第五卷八七〇—七一)にも出ている。

ついでながら、テリアカ製法に関する專書は他の医学者もかなり多数書いたものらしい。その一二の例をあげて見ると、一二七〇年にアフマド・ブヌ・アブダル・アズィームという医学者(Ahmad b. 'Abdal'azim al-Anṣārī)は Jamī' al-iftitāq wal-itifāq ḥiṣān'at at-tiryāq (テリアカ調製の種別と処方)という本を著わし、またエルサレムの人らしいアッ・タヌービー 'Ahmad b. Yūsuf al-Tanūkhī al-Maqdisī という人は一二五八年に Al-kitāb al-ashraf fi ṣan'at al-diryāq al-munqid ḥi'l-nufūs al-sharifa min al-talaf (尊き生命を破滅より蘇生させるテリアカ調製についての貴重なる書)を著わしたとのことである。⁽¹⁵⁾

七 イル汗国時代のテリアカ

モンゴル軍をひきいて一二五八年にバグダードを攻略し、事実上、アッバース朝を滅ぼしてしまったフラグ汗はイランのトゥース生れの碩学ナスィールツ・ディーンを保護し、後者は前者の保護のもとにマラーガに当時においては世界で最も進歩した天文台を建設したことは有名の事実で、筆者もかつて「日持上人の大陸渡航について」と題して、本誌に発表

したものの中に、この人の業績について言及したことがある。⁽¹⁶⁾ エジプト近代の学者アフマド・タイムール Ahmad Taymur (一八七一・一一—一九三〇・四)の、その死後に刊行された著作中に al-Taswir 'inda al-'arab (アラブの素描) という一書があり Zaki Muhammad Hasan が補注を加えて刊行したものである。この書の中に (三五—三六頁) Fuwat al-wafayat という書をひいて Nasir al-din al-Tusi はフールキー farūqi というテリアカの製法を図解いれで著わし、これをフラグ汗に献じたということを書いている。⁽¹⁷⁾

このフールキー、またはアル・フールクというテリアカは別に大テリアカ (tiryāq al-kabir) といい、その製法は前文にナジュムッ・ディーンの書から訳出しておいた如くである。

イル汗国時代にはこれがよく行われたらしく、この国の王廷の侍医でかつ宰相の重職に登り、また有名な「集史」Jamī-ut-Tawārikh を著わしたりしたラシードッ・ディーン・ファズルッラー Rashid al-Din Fadlullāh (一二四七—三二八) の書翰中にもそのことが見えている。この人の書翰は五十通あまり伝わっているが、それは彼の秘書であつたアバルクー出身のムハンマドという人物が集録したもので、英国の E・G・ブラウンによれば、そのうち医学、薬学に関するものは十通ほどある由である。

そのうちの一つで、第四十二通目の書翰は、殆ど全文が、ラシードッ・ディーンの生れ故郷のハマダーンの病院に關したものである。同病院は収入を横領されたりしたため、甚だみじめな状態となつたが、新たにイブン・マハディー Ibn Mahdi という医人を招聘し、病院のたて直し、とくに患者の福祉と必要な薬品類の充実に努めるという任を託した時のものである。薬品中、入手困難なため、とくに意を用いて備えておくようと命じたものは、捺印粘土 Terra sigillata (tin-i-makhtūm、ギリシア産の粘土で、捺印がしてあるもの)、バルサム油 (rawghan-i-balsān)、マブンスルム (sādhaj-i-hindi) およびフールクのテリアカ (tiryāq-i-farūq) などであつた。その次に、同病院の財政を整えることについて

いろいろと指図し、これらの任務を果し、かつ薬剤士、外科の助手、料理人その他の役員を任命し終ったならば、タブリーズにもどり、何分の恩命をまつようと命じてあるが、この手紙をラシードッ・ディーンは一二九一年にパレスティナのカイサリアでしたためた旨も附記してあるという。⁽¹⁸⁾

このようにイル汗国時代のイスラム世界でテリアカが盛に用いられたとすると、それが元朝治下の中国にも影響する可能性は十分あったのではないかと私には思われる。ラシードッ・ディーンの書簡の第五十一通目は、その息子のサードッ・ディーンにあてたものであるが、その中で彼は自分がタブリーズの近郊に建設した町 *Rab'-i-Rashidi* が繁栄していることをのべ、二十四のカラヴァンサライ、一千五百の工場、三万の美しい住宅、その他、園林、浴場、商店、粉ひき場、織物や染物の施設、製紙工場、および一箇所の貨幣鑄造所などがあることを告げている。この町の住民はいろいろの都市や国々から慎重に選り出されたひとびとからなっているが、専門のコーラン読誦者のみで二百人も居り、それぞれ固定給をもらい、毎日、一定の礼拝堂で聖典を読んだり、四十名の優秀な見習生を訓練しているとも云っている。また学者街 (*Kucha-i-'ulana*) があり、そこには四百人の神学・法学・伝承学の専門学者が相当の俸給諸手当をうけている。その近くに学生街があり、もろもろのイスラム国からやって来た一千人の熱心な学生たちが住んでいるが、これらはそれぞれ才能に応じて指導と奨学金をうけている。またインド、シナ、エジプト、シリアその他の国々から迎えられた五十名の練達した医者たちも居って、それぞれに十名の熱心な学生が配属され、これらはみな病院で特定の任務を課せられている。この病院には、その外、外科医たち、眼科医たち、接骨医たちも配属になっており、それぞれ五名ずつの学生の指導を分担している。これらの人々はすべて治療者街 *Kucha-i-nu'aliyan* に住んでいるが、そこは病院の後方にあたり、ラシード町 *Rashidabad* の花園や果樹園の近くにあるといっている。⁽¹⁹⁾ 遠くインドやシナなどから来た医学者も、イラン、シリア、エジプトなどの医学者と同僚となって治療や研究にあたっていたことがわかるのである。イル汗国と元朝の中国とはかなり関係が密接で

彼我の間に文化の交流も行われたことはいうまでもないことであるが、イスラム医学とともにテリアカ調製の技術なども、あらためて極東にもたらされたのではないかと推察されるのである。

八 マムルーク朝時代のテリアカ

もう一つイスラム世界の代表的な病院で、テリアカが尊重されていた例をあげて見たい。エジプトのマムルーク朝の王カラーウン *al-Mansūr Sayf al-din Qalāun* (在位一二七九—一二九〇) がカイロ市内に営んだマールリスターン (病院) は中世時代を通じ、恐らくは最も壮麗な病院だったろうとマイヤーホフも云っているほど⁽²⁰⁾であった。カイロの病院で最も古いものは西紀八七三年頃にアフマド・イブン・トゥールーンが建てたものであったが、カラーウンが一二八四年ころに建てたものは規模においてこれを凌ぎ、アル・マンスールの大病院 *al-Marīṣṭān al-Kabīr al-Mansūrī* とよばれていた。マンスールとはカラーウンの称号であるが、かってシリアに出征したときダマスクスでひどい腹痛になんだことがあつた。同地にはザンギー朝のヌールッ・ディーン王が建てた病院があつたが、その医師たちの手当てで回復することを得たカラーウンは、カイロにも立派な病院を建てることを誓い、それを実行したものだといわれている。それで毎年百万ディルハムを寄附して、その経営にあて、貧富、男女の別をとわずすべての病人にこれを開放し、男子病棟と女子病棟とを設け、男女両性の看護人において患者の世話にあたらせた。熱病患者のためには大きな特別病棟が設けられてあつたが、そのほか眼科、外科のためにそれぞれ一棟、また赤痢その他これに類する病気のための病棟も別にしてあつた。その他、厨房、読書室、薬品や器械類などの貯蔵室、薬局、医師たちの私室も完備していたことである。⁽²¹⁾

一九一三年になって、この病院の運営規程をしるした記録が発見された由で、羚羊のなめし革に五二八行の文字がしるしてあり、一二八五年から八七年にまたがる日附けもあるという。この興味のある文書の原文を見る機会を私はまだ持つ

ことが出来ないでいるが、マイヤーホフによると、その中には次の如き薬品の支給に関する箇条もあるよしである。

「この財団の支配人は練り薬や清涼飲料をつくるための砂糖と果物、および飲みものを製するために必要なイーストなどに要する費用を支払わなければならぬ。さらにまた、他のすべての薬品、薬草類、膏薬類、目薬類、粉薬類、香油類、各種のテリアカ、錠剤類、飲物類、その他すべてこの病院が必要とする品々の費用を支払うことになっている。どの薬品も適当な時期に調製し、特別の容器に貯えておかなければならぬ。支配人は使用した諸薬品については、財団の収入中から補充しておかなければならぬ。どの患者も、すべて必要なだけの薬品を受けるだけで、必要以上にもらうことは許されていない……」⁽²²⁾

これによって、この病院では各種のテリアカをも備えていて、随時に使用したらしいことがわかる。なお、この病院はオスマン帝国治下にはいつてから、一七六〇年にマムルーク貴族のひとりアブドル・ラフマーン・カジュダーが復興したが、そのときの記録も残っている由である。⁽²³⁾

イスラム諸国の文献にテリアカの名が見える場合は相当に多数で、以上あげてきた如き諸例はほんの九牛の一毛にも比すべきものにすぎない。もっと広く資料を集めて比較したならば或は面白い結果を生ずるかも知れないが、中々困難の仕事である。千夜一夜物語などにもこの言葉が散見し、その中の詩などにも歌いこまれているようであるが、本稿ではそのことは割愛することにした。

九 テリアカ絵本のこと

ただここにどうしても言及せざるを得ないのは「テリアカの書」Kitāb al-Tiryāq と題する絵物語の稿本が、これまでに少くとも三部ほど発見されていることで、これはテリアカのことよりも、イスラムの細密画研究の好資料として美術

史家がとりあげて、しばしば問題にしている。恐らく、この種のもは他にもかなり多数行われていたのであるが、このことを見ても、いかに中世のイスラム世界でテリアカが尊重され、また人気の的であったかが推察されるように思われるのである。

このテリアカ絵本のもっとも美しい一つはパリーの国立図書館の稿本部に秘蔵されているが、一九四八年にエジプトのビシユル・ファールス Bishr Fares 氏によって発見された。もう一部はウィーンの国立図書館にある。両者は大体、同一内容ではあるが、別の画家の手になるものである。更にまた最近、もう一部がカイロで発見されたらしい。

私は一九六〇年の冬、シカゴ大学の東洋研究所内近東図書館で、ビシユル・ファールスの研究書を一読した。次の年の八月、パリーの国立図書館を訪れて、原本を見ようとしたが、折から同稿本は複製作業中だったので借覧がかなわず、そのままにしている内に、同地滞在の期日が尽きてしまった。その年十月、カイロに行き、ファールスの研究書たる *Le Livre de la Thériaque, manuscrit arabe à peintres de la fin du XII^e siècle conservé à la Bibliothèque Nationale de Paris, Le Caire 1953. (Publications de l'Institut Français d'Archéologie Orientale du Caire, Art Islamique Tome II)* を入手することが出来た。ファールス氏は、この書をイスラム絵画史上から研究したのであって、格別テリアカの伝播史を調べるためではなかった。同氏がこの珍書を発見した事情は次の如く述べられている。

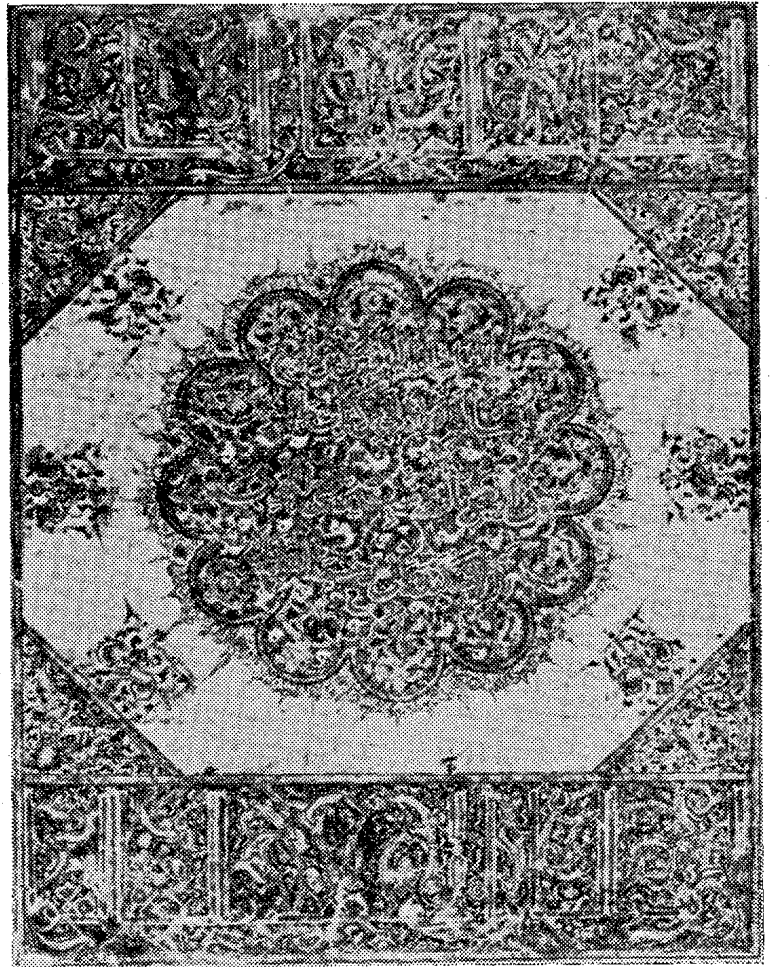
「一九四八年の秋、パリーにおいて、私は国立図書館に属するアラビア語部の最も古い稿本類を精査することに没頭していた。退屈な探索の数週間のはてに、私はふと第二九六四番(ただし以前の附加第二四三三番)と番号をつけた稿本をとりあげた。それには「テリアカの書」と題してあつた。⁽²⁴⁾」

一八八三―九五年にド・スラーンヌが編集した「アラビア語稿本目録」にはきわめて簡単に記載されているが、一九二〇年にプロツシェが編した「ビブリオテック・ナシヨナルの東洋諸稿本の絵画」にも、同じ人の「ビブリオテック・ナシ

ヨナールのトルコ語、アラビア語、ペルシア語などの東洋諸稿本の彩色絵⁽²⁵⁾(一九二六年)にもこの稿本のこととは載せてない。また一九三八年にパリで開かれたイラン美術展にもこれは出品されなかった。その後も、これはイスラムの初期のミニアチュールの目録やその他に登載されたことがなく、いわば古書堆裡に埋もれていたのである。ファーレス氏の発見によって始めて、諸種の新聞、雑誌などにこの書のこと紹介されるようになったのである。

この絵本がえがかれたのは西暦一一九九年であるが、十三世紀前のミニアチュールの現存しているものの数はきわめて稀少であるところから、ファーレスはこれを「パリーのテリアカ」と命名し、バグダード派の細密画をいれたアラビア語稿本中の最古のものの一つとしている。ウィーン国立図書館のものは、やや時代が下って十三世紀後半に属し、クルト・ホルター⁽²⁶⁾のこれに関する研究がある由である。

さてパリ本の表題は「すぐれたる医人ガレンが練薬についての最初の講説集よりとれるテリアカの書」*Kitab al-Dir-yaq li-l-hakim al-fadil Jalinus min jawāmi' al-maqalat al-awwali fil-ma'ajūnāt wa'arī' ahā*にこれにアレクサンドリアの高名な学者ヨアンネス・グラマティコスが註釈を加えたもの (*bi-tafsir Yahya al-Nahwi al-Iskandarani*) とするしてある。ギリシアのガレン(一二九頃—一九九頃)のテリアカ書というものは確にあってらしく、しかもアッバース朝の初期にアブー・ザカリーヤ・ヤフヤー・イブヌル・バトリーク *Abū Zakariya Yahya ibn Batriq* というクリスチャンの学者によってガレンの *De theriaca* がアラビア語に訳出されたといわれている。(Aldo Mieli, *La Science Arabe, Leiden 1938, p. 70, note 3.*) しかしこのテリアカ絵本が、そのガレンのテリアカ書であるとは考え難いし、恐らく後世人がこれをガレンに仮託したものにすぎぬと見るのが妥当であろう。ファーレス氏もやはりそのように見ているようであるが、次にヨアンネス・グラマティコスの補註ということも、その通りには受取ることとは出来ぬであろう。マイヤーホフも、アレクサンドリアのヨアンネスがテリアカについてガレンの書に註釈を加えたなどということは考



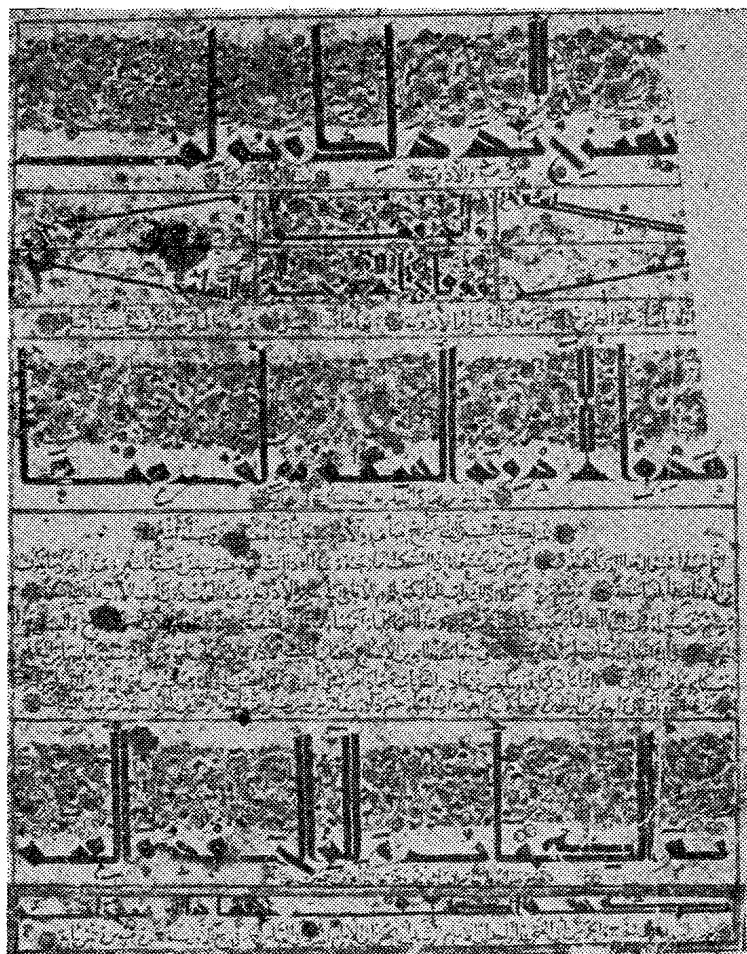
第一図 テリアカ絵本の標題と著者名

の一部分に見える書きこみによって知られるとのことである。

ボナストル氏の在世当時はフランスその他西欧諸国でも盛にテリアカが使用されていたのであるが、そのことは文学作品からも窺うことが出来るよう思う。一例をあげるとテオフィル・ゴージェティエ *Theophile Gautier* が一八六一—六三年に書いた隊長フラカッス *Le Capitaine Francasse* の第五章に、この物語の主人公スイゴニャックが加わった旅役者の群のひとりが「……私たちの芝居用の劔には刃もなければ、先もない。何故といってにせの傷さえあたえればいいからで、

えられず、おそらくアレクサンドリア後期の神怪・魔法的の作品のひとつ *ein mystisch-magisches Erzeugnis* でもあろうという意見を述べている由である。しかしガレン原著、ヨアンネス校註と称している点は明かであって、アラブの学者の名前など全くあげていない点は面白い。

ところでこのパリーのテリアカ絵本は、どこで作製され、どうして国立図書館の書庫に収まることになったものであろうか。その点は甚だ不明のようである。一八三二年十一月七日まではボナストル *F. Bonastre* というパリーの薬剤師の所有品であった。またボナストル氏は、これをペルシア語の本と思っていたらしいことなども、この書



第二図 テリアカ絵本の製代年代・書家名など

そんな傷は幕が下りればたちまち直る。膏薬も、繻帯用の布もテリアカもいったものではない。(et cela sans onguent, charpie ou thériaque) というせりふをいう条がある。後文に述べる如く、わが国では現在でもテリアカを造っている製薬所が僅ながら残っているということであるが、このものがヨーロッパの社会から姿を消したのもそう古いことではなかったのである。

薬剤師ボナストルの所有に帰す前に、早くも一八一五年にオリヴィエという寡婦が、これを当時の王立図書館(現在の国立図書館)に売ろうとし、フランス東洋学の大立物たるシルヴェストル・ド・サーシーが、これを鑑定して「細心の注意を払って書いてあって貴重なものと認む」と折紙をつけたけれども、ただその代金を十三ルイしか出せないと云ったので話はずとまらなかつたとのことである。この本は三十七葉で、縦三七センチ、幅二九センチ、クリーム色の厚い麻紙をつかつてあるという。

第二十一葉目には、この本を書いた書家の名前や、またこれがイスラム暦五九五年のラビーウル・アッワル(西紀一九九九年一月)に出来上ったことなどを記し(第二図参照)、第五葉ではこの書が学者中の王者(malik al-'ulamā)アブ

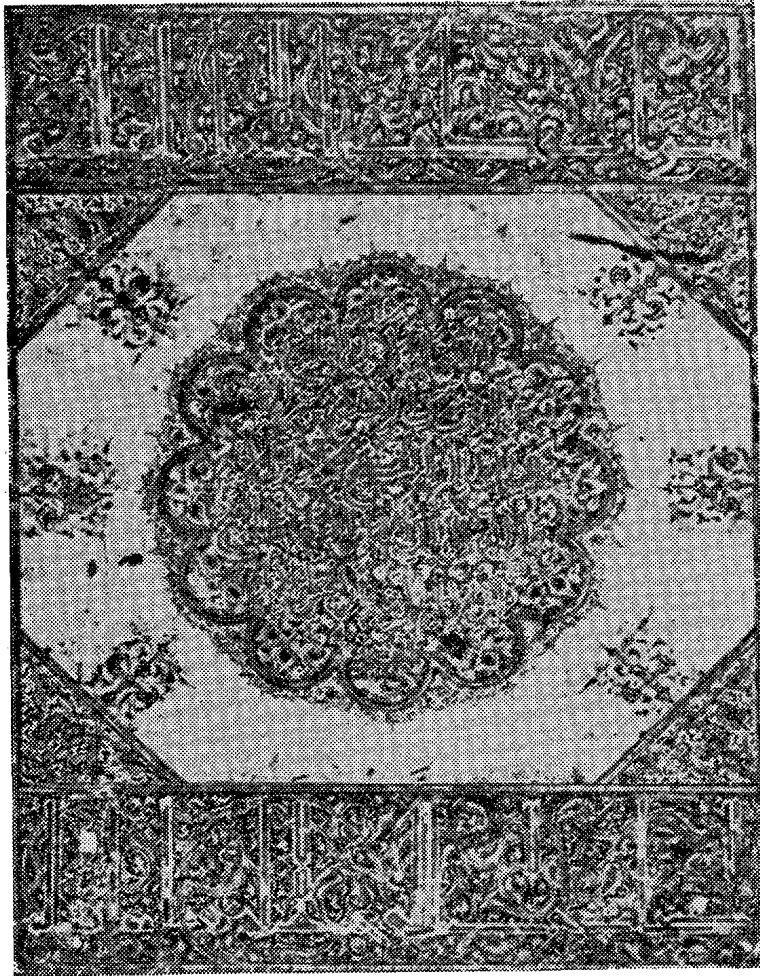
ール・ファトフ・マハムード Abu'l-Fatḥ Mahmūd b. Jamāl al-dīn b. Abū'l-Fatḥ b. Abū'l-Hasan の文庫のために書かれたという献辞が上段のクーフィック書体と中央の花形模様の中のナスヒー書体の文とによって示されている。(上段のクーフィック書体は li-khizānat al-imām al-'ālim 学識深きイマームの文庫のために) (第三図参照)

ちなみに書家の名は al-'ālim Muḥammad b. Abū'l-Fatḥ b. Abū'l-Hasan とするので、恐らくこの本を贈られたマハムードという人物の父方の叔父であつたらうとファーレスは考えている。⁽²⁷⁾ただし、この二人の詳しいことについてはま

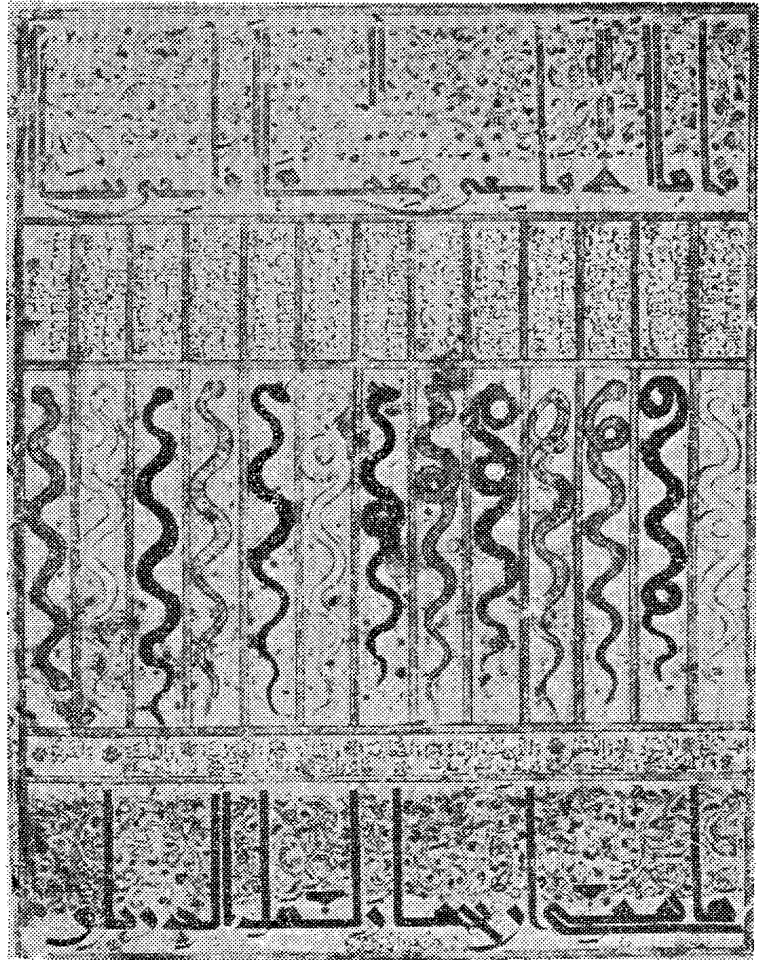
だ何等の記録も発見されていないが、言葉づかひや何かで恐らく、マホメットの従兄弟のカリフ、アリーの系統であろうというのである。

遺憾なことは、この書が一体何処で書かれたかを知るべき手がかりの無いことである。ファーレス氏は描写の手法と画像の様式からして、エジプトではなく、シリアカイラクのものではないかと考えている。そしてこの本を書いた書家が、同時に画の方をもえがいたという可能性もかなりあるものとして⁽²⁸⁾いる。

テリアカの製造に毒蛇が用いられることはすでに前節でしるしたが、巴里のテリアカ絵本にも十三種の毒蛇の図があり、上段にはクーフィック書



第三図 献辞のあるページ



第四図 毒蛇の図

体で「毒蛇については、それぞれ（特殊の）名をもてるものあり」とあり、同じく後段にも同じ書体で「テリアカを製するに選ばなければならぬもの」としてある。そして中段に彩色した毒蛇をえがき、それぞれの上方に、その名称と説明とをナスヒー体でしるし、各項の最後に「これがその図である」(wa-hādihī sūrathā) という一句をつけ加えている。(第四図参照)

なおウィーンのテリアカ書には三十一種の蛇の図がはいっている由である。

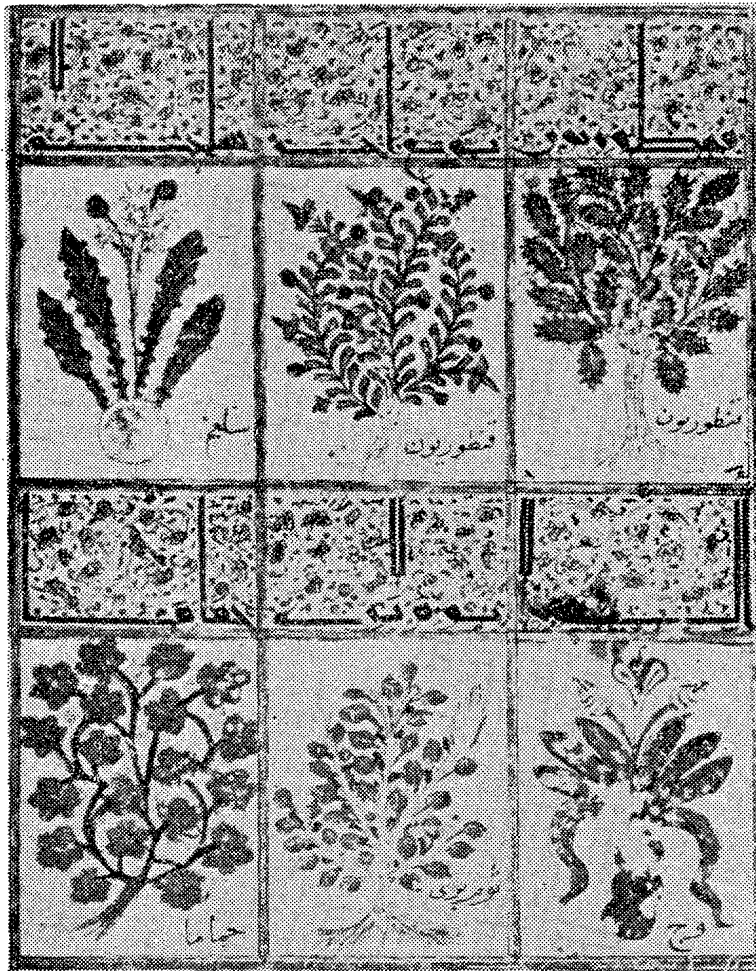
第五、第六の二図は同じくテリアカを製造するに用いる薬草をえがいたものであるが、ウィーン本には、これに相当する図ははいっていないとの

ことである。

各薬草の名は絵の上にクーフティック書体でしるし、更に図中に普通の書体でも記してあるし、外側に附記している場合もある。各頁に六種づつの薬草をえがき、原本では都合十三頁をこれにあてているが、ファールネスはそのうち二葉のみを紹介している。いま、その名称を簡単に説明すると、第五図の上段は向って右が qantūriyūn (やぐるまそう) 中央も同名で、欄外上方に、別種類と附記してある。イブン・バイタールはカントゥーリューンに大 (kabir) と小 (saghir) の

二種があるといっているが、右のが大の方で葉が大型 (Centauria centaurium) のもの、中のが小の方 (Erthrea centaurium Pers.) であらうかと思われる。

上段の向って左は shajiam (蕪^{アキウ}) である。イブン・バイタールによると、蕪の一種でブニヤースと呼ばれるものの子は大テリアカを製す際に用いられるとあるから、これはその種かも知れない。次に下段の向って右のものは、クーフイック書体で al-wajj と定冠詞をつけて説明している。定冠詞をつけたのはこのものだけだが、これは恐らく書道上の形をととのえるためだろうといわれている。ワッジは



第五図 薬草図譜 (1)

普通 *Accorus calamus* (菖蒲) であるといっているのであるが、あやめ科の *Iris pseudacorus* にあたるものもあるという。Ch. Kuentz はこの図の形状から見て、後説の方がよいであらうと云っている。⁽²⁹⁾
 中央はスーム・ハッリー *Thum barri* である。学名は *Teucrium Scordium* L.。単にスームとはにんにくのことである。一説にスーム・ハッリーのことを「蛇のスーム」*Thum hayya* と呼ぶという説もあるが、実は別物ともいわれる。
 下段左方は *Hamama* (白豆蔻^{ビヤクク}) である。イブン・バイタールはフナインの「テリアカの書」を引き、このものの薬効をのべている。このフナインはア

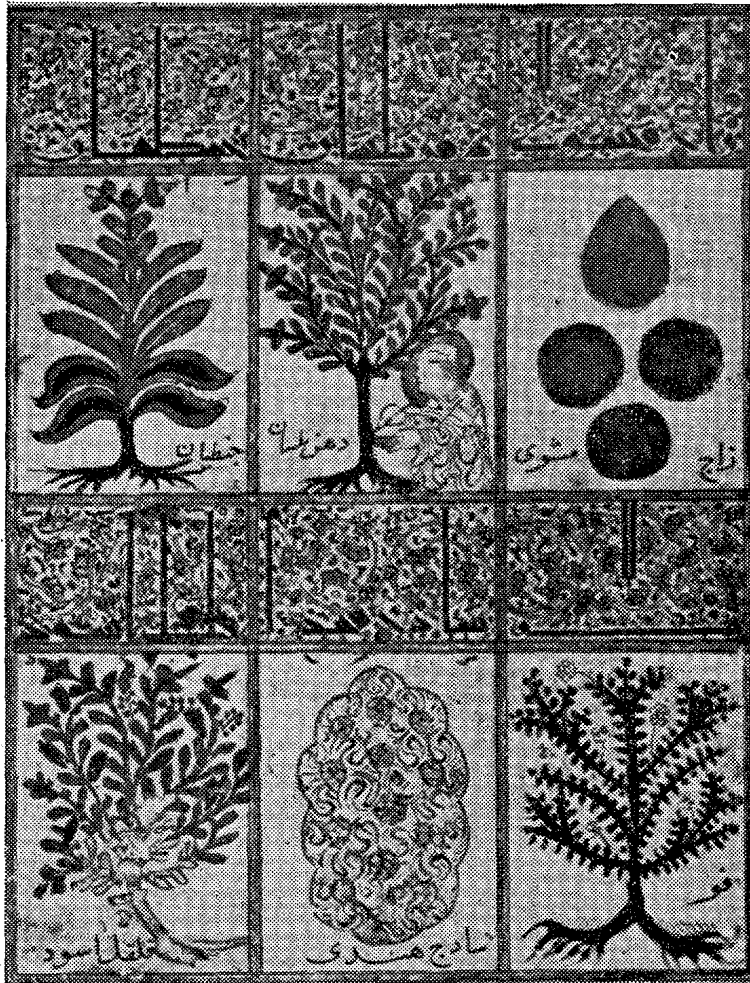
ッバース朝の盛時に多くのギリシア文献を翻譯し、ことにギリシア医学の移植に功のあったフナイン・ブヌ・イスハーク Abu Zaid Hunain b. Ishaq (八〇九頃—八七三) のことかと思われる。al-Nadim の目録書 (al-Fihrist) には、⁽³⁰⁾この人の著作目録中に二章よりなる Kitab al-tiryag を載せている。恐らくこれはアラブ医書中、最古のテリアカ論と見てよいかと思われるが、その稿本がどこかに現存するのかどうか、プロツケルマンの書誌などにも挙げてないので、不明である。恐らくは散佚に帰したものであろう。

第六図 (藥草譜第二) の上段向つて右は zai mishwiyu (焼いたヴィトリオルの義) ヴィトリオルには緑礬 (硫酸鉄) 胆礬 (硫酸銅で青色) 皓礬 (硫酸亜鉛で白色) など諸種のものがあるというが、アラビア語では黄色のものを qulqutar 白色のものを qalqadis 緑色のものを qalgant 赤色のものを sūri と呼ぶ。緑礬はまた shahira と、イラークのヴィトリオル Zaj al-ʿIrāq とも呼ばれるというが、この図に示されたものは写真のため色がわからないが、恐らく緑礬ではないかと思われる。イブン・バイタールに、緑礬はよく出血をとめるが、焼いて用いると一層よく効くとある。

上段の中央は duhn balasān (バルサム樹脂) とあり、バルサムの脂を採取しつつある可憐な人物がかき添えてある。エジプトのカイロ附近が名産地とされ (アイヌツ・シャムスすなわちヘリオポリスあたり)、犬座の星が上ったあとに樹脂が出るので、鉄片で樹皮に切れ目をいれて採取するが、その量は少なく、一本の木で、年に五十ないし六十ポンドくらいしかとれない。採取すればすぐ金にかえるが、樹脂の目方の倍額の重さの銀と交換することが出来る。故にいろいろの交ぜものをして相手をだまそうとするものがあるが、純粹なものは羊毛布にたらし洗うと、何の痕跡も残らぬのに、交ぜものをしたものはしみが残るのですぐ看破することが出来るという。また牛乳に入れると純粹のものは、乳を凝り固まらせるが不純のものは油の如く浮き上って、一つに固まったり、星の如く散らばったりする。さそりに刺されたときもこれをつけると特效があり、その他いろいろの薬用に供せられ、大テリアカの基本材料のひとつであるとイブン・バイタール

は記している。

上段向って左は *jantian* (*Jantiana*, *Gentiana lutea* L. 竜胆^{りんとく}) で、アル・ラーシー(ラーゼス)の著書中に、りんどうは重用薬のひとつとしてテリアカの中に加えられるが、特に狂犬に噛まれたときに特効があるし、致死の毒を飲まされるときも、よくこれを中和し、毒蛇に咬まれたり、蝮に刺されたり、その他すべて有毒の動物に傷けられたときによろしいと述べてあるとらう。(Ibn al-Baitar, No. 515)



第六図 薬草図譜 (2)

下段の向って右は *Fo* (鹿子草^{かのこくさ}) であり、中央は *Sadaj hindi* (インドのサーダジュ) としるしてあるが、普通は *Sadaj* と書く。マラバスルムまたはマラバートルム (*malabathrum*, *malabattrum*) のことで、インドのある地方に産する水草で、葉は水面上に出ている。採集し、麻糸に通して乾して貯蔵する。その芳香はやや甘松に似ているとイブン・バイタールは記している。最後に下段の向って左は *Filfil aswad* としてある。黒胡椒の義である。 *Fulful* とも発音する。イブン・バイタールはその実のよく熟したものは黒色を呈するので黒胡椒、未熟なものは白胡椒であるとい(実際はその逆)、またその実が生じて間もない



第七図 女神像 (1)

ものを長胡椒と呼ぶと云っている。(実際は別種)

次に二枚の女神像がある。第七図の方は上段にクーフィックで *sāhibhu wa katibhu aḍ'ar* としるし、下段には *Abi al-Fatḥ ibn al-Imām al-Rashid* とあるが、上下を合わすと「かれの朋友にして、また書記を兼ねし、いと弱きアブール、ファトフ、いと正しきイマームの子なる……」となるが、これは、この書を手がけた書家のことである。

中央にジュッパというちゃんちゃんこの如きものを着た女神がえがかれている。素肌で胸部の一部をあらわし、原図では赤色で臍をえがいてあり、

またジュッパはエメラルド色の緑で、濃緑の縁かざりがあり、下袴は黄色であるという。すぐ両側に二人の侍女がおり、また四隅にもそれぞれひとりづつの女性がいるが、その背には天女の如く翼がついている。この図と第八図とは意匠が全く同じであるが、ただ後者においては女神は白色に群青の模様のあるジュッパを着ているほか、それぞれのものの彩色がことなっているのである。

ファールス氏も、この両図は一見して仏画を見るが如き観をあたえ、全体を通じてインド・シナ・ペルシアなどの影響

をただよわし、よくアッバース朝の特徴を示すものだとしている。両図とも女神の周囲を二匹の竜蛇がとりまき、さらにその中に新月がえがかれ、女神はこれを両手で捧げる形をとっている。新月をえがくにその両端が接近したり、光芒により連っていたりするのは古代からのメソポタミア芸術の特徴であり、太陽神や金星（ヴィーナス）神の上に月の神をおいて崇拜することは、すでにシュメールやアッカド人の間で行われたことで、これを Sin または Nannar と呼んだ。新月形はその姿またはその象徴としてきわめて古い時代から用いられてきたものであるが、これがイスラム時代にもひきつがれたのである。ただし、月神は男性と考えられ、



第八図 女神像 (2)

古来からのその図像では新月を捧げるものは男性の姿をとるのが常であるが、このテリアカの書の二つの図では耳輪をつけ、頭髪を編んで、爪を染めた（女神は黒く染め、両側の侍女は紅色に染めている）、明かに女性の姿をしている。ただし、月神 Sin (Nannar) とは Nin-Gal (アラム人やフェニキア人の Nikkal) とよばれた妻があると考えられた。このような信仰はハッラーン地方を中心として十一世紀ころまで行われてきた天体崇拜のサービイ Sabi' 教徒の間に維持され、アラビア語で書かれたその教典のひとつによれば、毎年四月六日には「月の女神」のために牡牛を屠って祭る

行事が行われていたというのである。⁽³¹⁾

月神(スィン)は多くの美称をもって呼ばれていたが、その中には「植物の神」「治療の神」「スィンはいやしたまうもの」などというのもあつた。それで、この二葉の女神の図も、このような月神の功德にちなんだものとすれば、これがそういう信仰伝統をもったメソポタミアかシリアなどの人びとによってえがかれたものであるかもしれないとファーレス氏は考えている。あたかも、中国の本草家が神農の図を尊重するにも似たものかも知れない。

ハッラーン地方のサービイ教徒がイスラム諸学の發達に多大の功獻があつたことは、よく知られているところで、アッバース朝の盛時などには少からぬ学者がその間から現われたのである。有名な鍊金術の大家ジャービル・イブン・ハイヤーンなどもそのひとりだつたといわれている。(cf. Hitti, *History of the Arabs*, p. 358)。この人々の間に月の女神の崇拜が行われていたことなどを考えあわすとき、このテリアカ絵本の作製者も、それらと關係があつたのではなからうかなどと想像されるのである。女神の両側にいる侍女をファーレス氏は、昼と夜とを象徴するものではなからうかと云っている。そして外側の四隅にえがかれた四人の翼ある女性は四元素、或は四季を示すものではないかと考え、その後者の方をとることに傾いているが、アル・カズウィニー(一二八三没)などが記した四つの風を示すものとも考えられると云つて、断定をためらっている。

また女神のそばの二人の侍女や、四隅の翼ある女性の中には、あたかも舞踊しつつあるが如きものがあるが、これについてファーレスは、アッ・ディマシュキー(一二五六—一三二七)の地理書に、ハッラーンのサービイ教徒は月神の神殿で、人身御供を捧げて舞踊を行う風習のあつたことを記している個条を参考としてあげている。なお、第八図の上下にあるクーフィック書体の文章は上が *'ibād Allāhi subhānahu Muḥammad bin al-Sa'īd* 下方は *abi al-Ḥasan ibn al-Imām al-Mufīd* と読まれ、これもこの書をてがけた人の名前の一部分である。



第九図 バグダードのタリスマン（護符）門の彫刻
(M. van Berchem, Amida, Heidelberg 1910)

また両図とも女神の外側を二つの竜がとりかこんでいるが、その胴体は四個所において互にからみ合い、その頭部は巨口をくわっと開いて向い合い互に舌を吐きつつある。双竜からみあう意匠は中世のイスラム芸術では決して珍らしいものではないとのことであり、他にも多くの例を挙げることが出来るそうである。これが何を意味するかについて、すでに二三の説が出ているが、ファーレス氏はマジックの意義をもつものと考えている。たとえば十三世紀はじめに建てられたアレクサンドリアの城砦のひとつの門には浮彫で、二巨蛇が相からんで対する紋様があったが、これについて、イブヌッ・シフナという学者が、それは蛇に対する護符であり、これがあるためにアレクサンドリア城内では蛇に咬まれても平気であると記している⁽³⁸⁾。

またアッバース朝の末期にバグダードの城門のひとつとして護符門とよばれたものが作られた。それは一二二一年のことであったが、この門はそれから三十八年ほどしてフラグ汗のモンゴル軍の来攻のときも、その攻撃の目標のひとつとして記録に出てくるものである。これにも半ばは竜、半ばは巨蛇の状をしたものが、左右から舌をはきつつ向いあい、その中間に王冠を頂き、光背を負った人物がいて、左右の手をのばし、両竜の舌をつかまえている浮彫がある（第九図参照）。この中央の人物はアッバース朝のカリフを示すのだという説もあるそうであるが、一つの推測にすぎない。

二蛇相からみ合う意匠はシュメール・アッカドの遺物にも見られるとして、ファーレス氏はグデア王の祭奠用の盃（前二千五百年代と推定さる）をあげて

いる。(第一〇図参照)



第十図 グデア王の盃

一〇 医人たちとテリアカの由来

つぎにギリシアの九名の医人たちの肖像画が三枚はいつている。これはウィーンの稿本にもあるが、その方はただ九名の像を三列に並べたのみで単調なものである。パリーのテリアカ絵本の方は、一葉に三人づついれ、各葉の中央の人物をのぞいて、他はすべてその傍にひとりづつ弟子を配し、また他にも種々と面白い趣向をこらしてあるなど、興味の深いものである。

まず第十一図向って右は上方にクーフイック書体で *Marinūs* としてある。西暦二世紀前半に、多分アレクサンドリアにいたらしいとされている医学者で、解剖学にくわしく、その方面の著書が多く、またしばしばガレンの書中に引用されているという。その左側に侍するは高弟の一人らしく、やや小さくえがかれている。中央は *Andri-makhus* としるしてある。侍医としてローマ皇帝ネロ（在位五四一六六）に仕え、またテリアカの創案者ともいひ伝えられている。しかし誰がテリアカを最初につくったかについては異説もあるようで、そのことについては更に後説で触れたいと思っている。次に左端はこれもアンドロマクスとあるが、この方は中央のアンドロマクスの弟で、はじめ国王の土地測



第十一図 ギリシアの医人たち



第十二図 ギリシアの医人たち

量官をしていたが、感ずる事あって医学に転じたという逸話のある人物であろうか、それとも別人なのかよくわからない、次に第十二図の右方はアフリクリス Africlus とその弟子、中央は Yuyaghuras 左は Aftaqidus とあるが、これ



第十三図 ギリシアの医人たち

よ、みなガレンの原著ということになっているのもこのことのためかと思われる。

中央は Magnis al-Himsi (ホムスのマグニス) である。この人のことはきわめて簡単ながらアン・ナディームの目録書に記載があり、尿論その他の著があったとあり、時代はガレンより前とい⁽³⁴⁾う。その左は Aftaghuras とその弟子であ

らの医人たちについての詳しいことは、私にはわからない。第十三図の右は Jalinus (Galenos, Galen) とその弟子である。ガレンについてはここに繰返すまでもなく、ヒッポクラテスにつぐ、ギリシア医学の大宗であり、アラビア医学にも最も大きな影響をあたえたひとであるが、その影響はヒッポクラテスを凌ぐものがあるように思われる。一三一年に小アジアのペルガモンで生れ、二〇五ころローマで世を去った。自叙伝をも残しており、その多数の著書は大抵、アラビア語に翻訳された。この人はまたアンドロマクスが発明したテリアカを更に完成したといわれている。パリーのテリアカ絵本にしても、ウィーンのものにせ

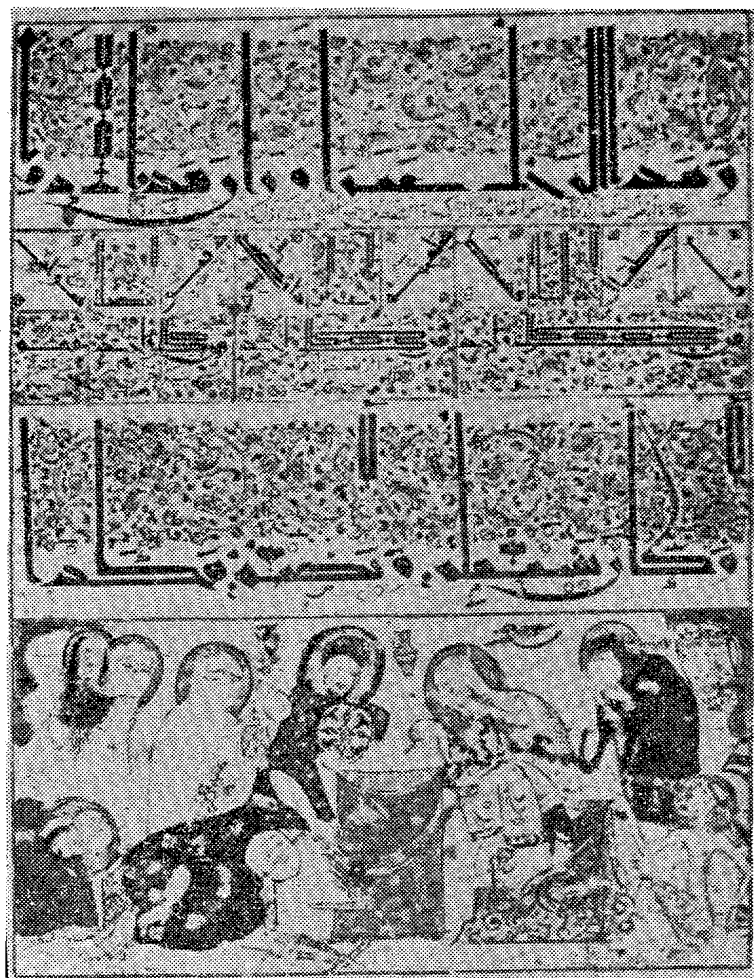
るが、この人についても詳しいことはわからない。

これら九人の学者はそれぞれその書齋にすわり、或は読書に余念なく、或はその弟子と語っている。手近のところにはインク壺、ペン入れ、書見台、燭台、水瓶、コップその他の品々がある様子。ギリシアの学風の影響を受けることの多かったアラブの学者たちは、勉学する場所の快適さを重んじた。そのような雰囲気を書き写すために、これら学者たちの頭上にもしばしば小鳥などが、楽しげにかけつたり、さえずつたりしているさまを書きそえてある。また学者たちの方が、その弟子たちより大きくしてあるのは、ファーレス氏によると、古代からのメソポミア地方の絵画の手法の一つであるというのである。

ウィーンのテリアカ絵本には、テリアカを調製している図が三つあり、この仕事にあたっているのはヒムスのマグニス、アフラグーラスおよびアフリクリスであるが、パリー本には「アブラクラーディスが、テリアカを造る図」（第十四図参照）と「アフラグーラスがテリアカを造る図」（第十五図参照）との二つがはいっている。ウィーン本では三図ともみな医人とその助手との二人をえがいているのみであるが、パリー本は医人と助手、病人、それに傍観者たちをあしらい、にぎ



第十四図 テリアカ調製(1) (アブラクラーディス)



第十五図 テリアカ調製(2) (アフラーグーラス)

やかな構成を示している。前者では右端に悄然として杖をもって坐る患者らしい人物がおり、その次には金袋をもつその妻らしい女がいる。左の後方にも助手が天坪で薬をはかるのを見いている三つの傍観者がえがかれている。後図の方は戸外においてテリアカを練っている所らしく、これまた向って右端には瘠せ衰えた病人がおり、その後方の婦人は幼児を胸に抱いているように見える。その次には恐らくテリアカを発明するヒントとなつたらしい、いくつかの市井の出来ごとが絵説きされているが、これは四葉ある。第一のものはアンドロマクスがたまたまある島に旅行したとき、一人の若者が屏の下にしゃがんで放尿していた。

そこを不意に毒蛇に咬まれたその若者は、くだんの蛇をば殺し、附近の月桂樹のところに行つて、その実と葉とをつんで食べているのを見た。アシドロマクスは、いぶかしく思い、そばにより、そのわけを訊ねたところ、若者は月桂樹が蛇毒を解く特效薬である旨を説明したという。

ただし、この絵には蛇に咬まれた若者の外に二人の人物が見える。どちらも馬にまたがっているが、ファーレスは、これは双方ともアンドロマクスで、向って右のは若者が蛇に咬まれたところを目撃したところ、左方は近よつて若者にその

わけを訊ねるところであろうとし、このようなえがき方は古くからシリアやメソポタミアで行われたものであると云っている。わが国の絵巻物などにもしばしば見られる様式であると思う。左方のアンドロマクスが、両方の手の人差指をあげているのは相手に何かしやべりかけていることを示すバグダード派絵画の約束であるという。若者は下半身が裸で、左手



第十六図 アンドロマクスと蛇に咬まれた若者

に殺した蛇をもち右手で月桂樹の葉をむしっている。大空には日輪が高くのぼり、鳥がとびかい、そして馬の足もとには一匹の犬をあしらってある。

(第十六図参照)

医人アンドロマクスの兄弟ヤムルーユス Yamylyus (ウィーン本およびカイロ本には Tullinus は某国王の土地測量官であった。ある大暑の日、仕事に出たが、疲れたので、馬から下り、とある樹蔭で昼寝した。たまたま毒蛇に手を咬まれ、驚き目覚めたが、死の迫っていることを覚った。そこで遺書をしたためて樹枝につるし、のどが乾くままに、側にあった瓶の水をむさぼり飲むのであった。すると不思議や、神気爽快なるを覚えはじ

め、毒は消え失せたらしい。木の枝を切って瓶の底をさぐって見たところ、こはいかに、そこには二匹の蛇が互に相噛んで死んでいるではないか。下段の文章はアンドロマクスがこの話を伝えるという形式になっており、最後に「舎弟は、か

くて全癒し、その職を棄てて、われに仕えるに至れり」と記している。

この図を見ると、向って左端に馬の前半身だけが見える。えがかれてはいないが、その背の上にヤムルーユスがいること



第十七図 毒蛇の人助け

を思わせ、国王の土地を測量かなにかしているという含みであろう。その次には同じ人が樹下に憩いをとっているさまがかかれ、その膝に近く、毒蛇が動いているのが見える。これと大きな瓶をへだてて対する無髯の人物は、衣服も変っているけれども、やはり同一の人物を示すものに違いなく、左手に木の枝をもつて、瓶の底の蛇の死骸をひきあげており、右手には小形の水瓶を持っている。すぐ上の木枝には、今しがたした遺書がさがつており「アッラーよ、わが罪をば許したまえ。

わが財産は貧しきもの、窮したるものに分ち与えらるるよう頼みあげます」と記してある。では向つて右端の騎馬の人物は何者であろうか。これは、同一のヤムルーユスが、毒死をまぬがれ、また馬にまたがってその場を去ろうとしている所なのか、それとも、たまたま、この場に來かかった第三者か、或はまた、兄のアンドロマクスなのか、何の説明もないのでわからぬとファーレス氏もいっている。

またこの絵の上方には鳥がとび、下方には流れがあって魚がおよいでいるのが見える。

第十八図はやはりアンドロマクスに関するもので、説明文は、これまた彼自身が語るという形式になっている。彼は時どき所有地に出かけて、農夫たちの労働を監督し、また従者に農夫たちの食物を運ばせる慣例になっていた。ある日のこと、従者は土のつぼに飲物をいれ、粘土で封印したものを持ってきたが、このつぼの中には蛇がはいっているのを知った農夫たちは、これを象皮病患者に飲ませて、業病を癒やすことに成功したというのである。

この絵は上下の二段になっていて、上段の左端にアンドロマクスが人夫たちの労働を監督している姿が見える。その次には従者が頭上に食物をのせた大きな盆をのせ、右手に封印をした壺をさげて立っている。農夫たちは短い上衣に下半身は裸でいるか、またはトッパンとよぶパンツひとつで働いている。上段は園芸にいそしんでいる有様をうつしているが、右側の二人は三角形の鋤すきをもち、これに右足をそえて、土を鋤いている。このような鋤は現代でもイラクやシリアの一部で使用されているとのことである。

真中にもう一人の農夫がいるが、これは膝をつき、半月形の鎌をつかって、もろこしの如きものを刈りつつある。この種の鎌はミンジャル、またはマンジャルと呼ばれるものであるという。

下段は穀おとしの光景である。左端に収穫物を背負わされた驢馬の半身がえがいてある。こうして運んできた収穫物は、図の中央の麦打ち場におろすが、これは粘土をつき固めてつくったものである。そして二頭の牛にひかせた穀打機をその上に往復させる。このような機械は現在もエジプトやシリアの農夫が用いているという。左方にいる二人の農夫のうちの一ひとは、熊手をつかって、麦からを空中になげのけているが、麦粒が下に落ちつつあるのが見える。この熊手は六本爪のもので、エジプトでもシリアでも、アサービィ（指）と呼んでいるそうである。この農夫の仕事は穀がらを麦打ち場にひろげることである。もうひとり、蹲った人物は手にふるいをとって、仕あげの仕事をうけもっているが、このふる

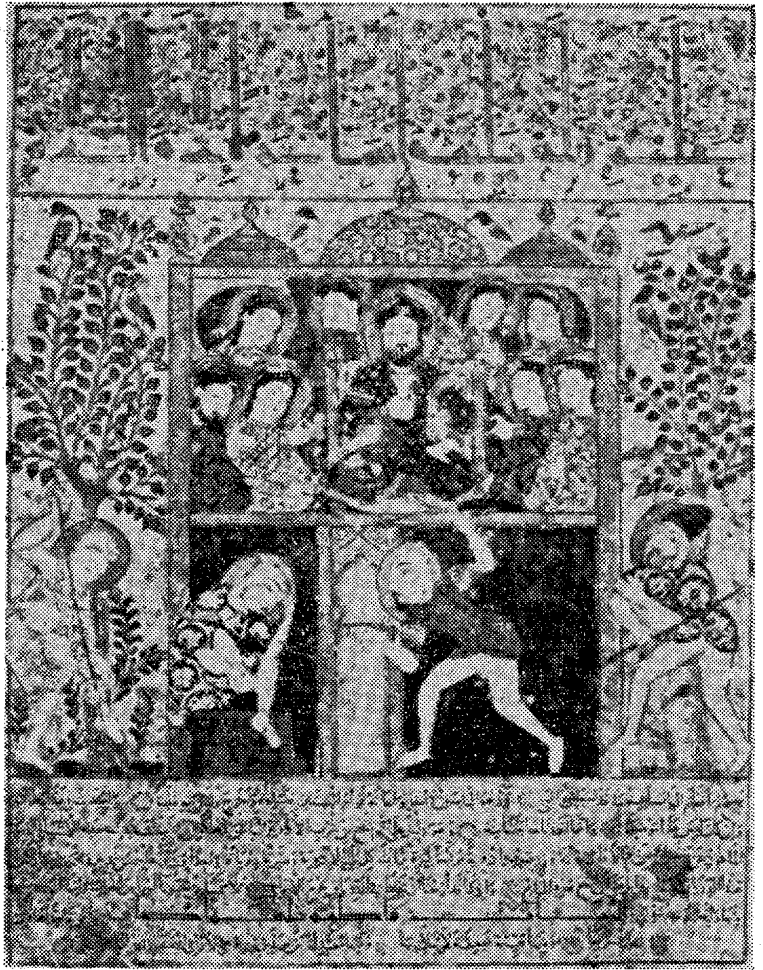


第十八図 アンドロマクスの農夫たち

いはグルバルと呼ぶものである。こうして十三世紀における肥沃な三日月地帯の農夫たちの活動がまことに面白くえがかれ、その方面の貴重な民俗研究資料となっているが、肝腎の象皮病患者治療の光景は忘れられてしまった如くで、その点、まことに愛嬌のある絵柄になっている。

最後の図はギリシアのバトゥールスという王とその年若い寵臣との物語りである。王の寵愛ひとかたならぬのを嫉んだ廷臣どもは、その若者を毒害し、死骸を庭園中の一屋になげこみ、そこに見張りをおくとともに、一方では国王に彼の急死をしらせた。たまたま一匹の毒蛇が屋内にはいて、若者を咬んだので、彼は蘇生し、助けを求めて、若者を中和したため、その若者の命を救う結果となったのである。

図の上段には国王とその廷臣たち、下方には園丁たちと王の若き寵臣がえがかれてあるが、若者は蛇に咬まれた右足をつかみ、苦痛と恐怖の色を浮べている。図の左右にはこの事件がおこったのが王宮の庭園内であったことを示すべく、樹木や園丁、小鳥などがえがいてある。しかし、向って左方では園丁は無心に働き、小鳥は樹上に森閑と羽を休めている。



第十九図 死者の蘇生

ところが、右方では小鳥は驚いてとび立ち、園丁は鋤を手に狼狽して走り出している。これによって事件の経過が示されているのである。

パリーのテリアカ絵本の紹介は以上でおわるが、何度も記した如く、これと殆ど内容は同じであるが、絵の手法やその他、かなり相違する点のあるものが、ウィーンやカイロにも伝わっているという点から見て、中世のイスラム諸国ではかなり多くこの類のものが行われていたということが考えられる。そうしてこれらが、絵の様式も説き方もアラブ化していながら、なおギリシアの影響を濃厚に残していることにも興味を惹かれるのである。

註

- (1) *Traité des Simples par Ibn el-Beithar*, vol. 1, p. 204.
- (2) Simonet は一八六二年にグラナダ大学のアラビア語教授になった。 *Historia de los Mozárabes de España*, 3 vols., 1897-1902. *Glosario de voces ibéricas y*
- (3) *Le Calendrier de Cordoue*, publié par R. Dozy, nouvelle édition par Ch. Pellat, Leiden 1961. *Avant-Propos*, pp. VIII-X.
- (4) *Ibid*, p. 95, 101.

- (5) Ibid., p. 101.
- (6) 守谷美都雄、「校註蕭楚歲時記」昭和二十五年、帝國書院刊、頁、一二三—一二八。
- (7) 守谷美都雄、「唐・五代歲時記資料の研究」(大阪大学文学部紀要第九卷、昭和三十七年三月)頁一一六その他。
- (8) Angel González Palencia, *Historia de la España musulmana*, Madrid 1945, p. 157,
- (9) Ibn Juljul, *Tabagāt al-'atibbā' wal-ḥukamā'*, 1955 Cairo, edition by Fu'ād Sayyid, p. 8.
- (10) Ibid. p. 98.
- (11) Husam Wafa Dijany, *Geschichte der Arabischen Medizin in Spanien*, Hamburg 1934, p. 16.
- (12) Brockelmann, *Geschichte der Arabischen Literatur*, Supplementband. 1, p. 833.
- (13) *Encyclopaedia of Islam*, Old edition, *Tibb* の項 (Carra de Vaux 執筆)
- (14) Ibid. p. 23.
- (15) Brockelmann, *GAL. Supplementband*, vol. 1, p. 898. n. 34 & 35.
- (16) 史学第二十九卷第四号、頁二二以下。田坂興道「中国における回教の伝来とその弘通」(昭和二十九、東洋文庫)下巻、頁一五四七にナースィルッ・ディーンの紹介がある。
- (17) Ahmad Taymūr はカイロの人、アラビア語学、文学に関する著書が多い。エジプトの近代作家として有名な Mahmūd Taymūr とその兄で比較的早く世を去った Muhammad Ahmad Taymūr はこの人の子である。なほ Ahmad の *Taswir* という書は、その死後、一九四二年にカイロで公刊された。
- (18) E. G. Browne, *Arabian Medicine*, Cambridge, 1921, reprinted 1962, pp. 107-108.
- (19) Ibid., pp. 108-109.
- (20) M. Meyerhof; *Pharmacology during the Golden Age of Arabian Medicine* (Ciba Symposia August-September 1944) p. 1866.
- (21) G. Browne, *Arabian Medicine*, pp. 101-102. なほ *Māristān* とはペルシア語で「病人の場所」を意味する *Bimāristān* のなまりであるが、現在ではアラビア語の *Mushtashfa* (健康が求められる所の義) という言葉が一般に用いられ、マールリスターンは専ら精神病院の義にだけ用いられる。
- (22) Meyerhof, pp. 1866-67.
- (23) Ibid. p. 1867.
- (24) Bishr Fares, *Le livre de la Thériaque*, p. 1.
- (25) G. de Slane, *Catalogue des manuscrits arabes*, Paris, 1883-1895.

- E. Blochet, Les peintures des manuscrits orientaux de la Bibliothèque Nationale, Paris 1920.
- do, Les enluminures des manuscrits orientaux turcs, arabes, persans de la Bibliothèque Nationale, Paris, 1926.
- (27) Kurt Holter, Galen (Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen in Wien, 1937).
- (27) B. Farès, p. 9.
- (28) Ibid. p. 9.
- (28) Ch. Kuentz, Essai d'identification des plantes figurées dans les vignettes des pages 56 et 57. (Le livre de la Thérique, Appendice)
- (29) Ibn al-Nadim, al-Fihrist, Cairo 1348 H. p. 41.
- (31) Farès, Livre, p. 25.
- (32) Mehren-Dimashqi, Manuel de la cosmographie du moyen âge, Copenhague, 1931, p. 46.
- (33) Sauvaget, J., Les perles choisies d'Ibn ach-Chihna (Mémoires de l'Institut Français de Damas), Beyrouth, 1933, pp. 135-136.
- (34) al-Fihrist, p. 407.